

佳作

声を届ける

青森県青森市立佃中学校

3年 畠山 礼伽

「人の命を助ける仕事がしたい」

白衣に身をつつんだ一人の女性との出会いが、私の看護師になりたいという思いをより一層強くさせた。

小学校1年生のときだった。祖父が急に倒れて病院に運ばれたという話を、学校から帰ってすぐに知らされた。夏休みに遊びに行ったときは元気だった祖父が病院にいるということが私には信じられなかった。悲しいという気持ちすら湧いてこず、ただ茫然としていた。

病院につくと、祖父にはいくつもの管がつながれていた。その姿はなんともいえないほど私の目には痛々しく映って、胸が締め付けられた。ベッドサイドに行き祖父の手をそっと握った。祖父の大きな手はいつもより冷たくなっていて、握った途端、私の目からは大粒の涙がボロボロと溢れ出した。悲しみの気持ちが心の中に押し寄せた。母は胸元に私を抱き寄せ、優しい声で、

「大丈夫、大丈夫。」

と言った。安心した気持ちと不安な気持ちが入り交じってさらに涙が溢れ、私の涙は止まることはなかった。

家族が揃ってから、主治医の先生から祖父の状態を聞いた。祖父は脳死状態だった。私にその言葉の意味は理解できなかったけれど、

「目を覚ますことはほぼありません。」

という言葉から、とても重い状態であることがわかった。けれど、心臓はまだ動いている祖父をどう見ればいいのか。「死」だと完全に判断できるわけでもなく、認めたくない。「生きている」とも簡単に言えないことが、私の気持ちを複雑にさせた。それでも、私は学校から帰ると、母と病院へ向かった。正直、管につながれた祖父を見るのはつらかった。けれど、少しでも祖父のそばに居たいという思いが強かった。

私が行くと、いつも祖父の体のケアをしてくれている看護師さんがいた。笑顔が素敵でとても優しい人だ。その人は、祖父のケアをするとき、いつも声をかけていた。私は、それが不思議だった。「聞こえているかもわからないのにどうして話しかけるんだろう。」気になって理由を尋ねてみた。すると、

「いつもおじいちゃんに話しかけていると、体がピクッと反応するときがあるんだよ。聞こえてないって思うかもしれないけれど、どんな患者さんにも声を

かけてコミュニケーションを取ることが大事なんだよ。」

そう教えてくれた。私はとても感動した。どんな状態の患者さんでも話しかけるといふ考えが素敵だと思った。そして、祖父をまだ生きている一人の患者さんとして見て、尊重してくれていることが、私にとってはなにより嬉しかった。

また、看護師さんはさまざまな面で家族のサポートもしてくれた。

「私たちは家族の皆さんの意見を大事にするので、してあげたいことがあれば遠慮なく言ってくださいね。もしあれば、一生懸命お手伝いしますよ。」

とまで言ってくれた。家族の心のケアまでして声をかけてくれる姿に、初めて看護師の存在は偉大だなと感じて、看護師の仕事をしたいと思った。家族でよく話し合っ、祖父をお風呂に入れてほしいと伝えると、

「わかりました。」

と、笑顔で答えてくれた。その笑顔は優しさと責任感で溢れていてカッコよかった。

祖父はお風呂に入れてもらった数日後、静かに息を引き取った。私は祖父の死を看取することはできなかつたけれど、祖父を抱きしめさせてもらった。管でつながれているときは手を握ることしかできなかつたけれど、抱きしめた瞬間は、幸せでいっぱいだった。そして、何よりも私は、看護師さんへの感謝の気持ちでいっぱいだった。最期まで丁寧なケアをしてもらって、祖父は幸せだったろうなと思った。また、看護師の仕事を間近で見られたことが私に与えたものは大きかった。「人の命を助ける仕事がしたい」という気持ちを強くするきっかけをくれた看護師さんにありがとうと伝えたい。

10年後の私はどんな看護師になっているだろうか。命と向き合う仕事は責任が大きくてどうしたらいいか悩むこともあるかもしれない。その時は、看護師になりたいと思った理由をもう一度考えてほしい。そして、「どんな患者さんにも声をかけてコミュニケーションを取る」をモットーに、自分の声を患者さんに届け、その家族の不安を少しでも和らげられるような看護師を目指してほしい。